

私が園長になりましたら

み な と

僅か五ケ年間に於ける保姆としての私の経験

は、實に面白く、且愉快に過ごしました。生々し

た元氣春の如き溫情、ゆつたりした寛容、これ皆

主任の君より示されたる教訓、此の中に、生活し

たる五ケ年は、實に幸福にしかも短く、私を感せ

しめたのであります。斯く私の敬愛する主任の君

の、半面を皆さまに見ていただき、且つは私の夢

見た様な、未來を讀んでいただきいて足りない所を

補つて、いたいいたなら、足らぬ勝ちの、私に取

つて、如何程幸かと存じまして、茲に一つ二つ申

述べて見たいと思ひます。

先づ園長とか主任とか申す位置につく前に、園

の主宰者として、同僚を引き廻はす者として、園

の全責任を引受ねばならぬものとして、次の要素

がなければならぬと思ひます。

一 深き思ひやりが至極大切です。

二 度量が大きくなければなりません。

三 自分の長所と短所を知り、人の長所と短所
とを見る明がなければいけません。

四 見識がなければなりません。

保育上自分の園で取つて居る主義が立つて居

なかつたり、研究上の諸問題に定見が立たな

かつたりしては、到底徹底的の事業は出來得

ません。

五謙遜と實行力が大切です。

何事も因となるべき所には十二分の力を注いで、それから生れた結果に對しては満足する様にして順次に進んでゆけば、失望も、落膽もありません。凡て「高慢は藝の行きつまり」と武術家が戒めて居ります。

以上の外にまだくありませうが、此の五つでさへ中々出来るものでない、併し此の中の一つが卓越して居れば慥に人を心服せしむる價值があると思ひます。

次に園長として職員組織が最も大切と思ひます。

一 保姆の撰擇

自分で自分の事を考へましても、自分に決して満足は得られませぬ。まして人の事、何から何まで、感心する様な人はありません。常識ある事、進歩的、研究的の傾向を有するこ

と。求知欲のある事、愛情に富める事、是等は缺く可からざる要件でありませう。尙最も注意すべきは、自分(園長)の短所を長所として居るものを入れるのが技倆ある園長でありませう。又黨派とか感情とか申すことを全然排除して門戸を廣くし己れより優れるものを求むる事を望む人こそ誠に人に長たることを得る人であると存じます。

二 統御

さて職員組織が曲がりなりにも出來たとすれば、次に起る問題は如何にこれを運用するかと云ふ事であります。

1 家庭的にすること。

此の家庭的といふことは随分意味深いこと、思ひます。

2 長所短所を見て其長所を利用し、其長所に信

頼たのむまることが大切であります、人の長所、短所を見出すに注意すべきは、先づ此人は何が長所であるかを専心に見ることであり、いろいろの機会を通る時に、ふと發見せらるる事が多いので、短所は其間に自然によく見えるものであります。

3 意見を用ゐること。

部下のものが何か意見があつたら、どんなつまらないと思ふ事でも、其人の力一杯の考を述べるのであるから、能く傾聴してやるのです。そして用ふべきは直ちに用ゐ、少しく手を加へて補つてやればよい事であるならば、これを活かして用ふる。苦言を呈するものがあれば、自分を空しくして其言葉を聞く。人の忠告は心から喜んで聞くことが必要です。人によつて聞き、人によつて怨む様な狭い量見では到底上に立てないと思ひます。

4 感謝。

部下の人が、園の爲めにしてくれる努力に對しては、常に感謝の意を持つて居らねばならぬ。何か常よりも骨折りの多かつた時、まごころから出る感謝慰藉の辭は千金に値する事を忘れてはならぬ。

又人に物を命ずるにも、十の内三分だけ述べてあとの七分は其人の伎倆に俟つ様にする、感謝の餘地と信頼の表示とは、其人を活かす要道であります。

5 功を部下に歸し失敗は己れに引受ける事。

これは自分の徳を全からしめ、部下を奮起せしむる要道であります。「人に先だつて憂ひ、人に後れて喜ぶ」といふ事は千古の金言であります。

まだく、研究や設備がいろいろありませうが、大本が立てば、あとは次第く、に附隨して出來て行

くものでありませうから、先づこの位に致して置
きませう。

要するに根氣くらべて、自己の人格を上げるにも、
職員に對しても幼児に向つても、撓まざる努力を
要することと思ひます。併しこの一つ一つの努力
はやがて幼児の幸福を生み出す事と存じます。私
達女性には陥り易いから常に心に戒めたいと思ふ
ふしを述べて終りを告げませう。

一長い間慣れて鈍感になり易い。

二研究も自分の力に餘つて來ると捨て、しま
ふ。

三研究心が盛にある時代には知らずく、片よ
つたりして全般に目を注ぐことを忘れたり、
無駄骨を折つて研究倒れとなることがあ
る。

四理論上ではなる程と感心しても、實際にあて
はめることを忘れる。

五外から親切な注意があつても、それば口
にこそ云ひ得るも實行は出來ぬと排斥し易
い。

六自分の頭を新らたに進めて行く爲めに目や耳
の修業が大切であるが、長い間にはこれを忘
れる。

七自分が元氣を失つて來ると、部下にはなるべ
く己れの意に盲従し易い、御し易いものを入
れたくなる。(完)